



社会福祉法人聖隸福祉事業団総合病院聖隸浜松病院

滅菌切迫の金属製コイルを活用し 医療界の発展に貢献する

社会福祉法人聖隸福祉事業団総合病院聖隸浜松病院（静岡県浜松市、岡俊明院長、病床数750床）の脳神経外科は医療機器メーカーと連携し、使用期限が月内に迫る滅菌切迫の金属製コイルを集め、脳外科手術に使用する取り組みを5年ほど継続している。

医療機器を無駄にしない 取り組み

「手術に係る時間を短縮して患者さんへの負担を最小限にすること、医療機器メーカーのロスを減らして社会に貢献すること、そして病院は滅菌切迫の医療機器を使用することでコスト削減につなげ医療界の発展に貢献すること、そんな三方よしとSDGsを実現する取り組みを継続しています」

こう話すのは、同院脳神経外科

の林正孝主任医長。5年ほど前にこのスキームを確立し、今も継続して取り組んでいる。

同院脳神経外科では、脳動脈瘤が破裂したくも膜下出血になる前に治療する「脳血管内コイル塞栓術」を年間約100件近く行っている。この手術で使用する

のが、プラチナで構成されている

金属製コイル（写真参照）だ。手足の動脈からカテーテルを挿入し、脳動脈瘤内にコイルを充填することで血流を遮断して脳動脈瘤を閉塞させている。こうしたカテーテル治療の発展を支えているのは、様々な機器（デバイス）の開発が進んだことが背景にある。優れた機器があるからこそ患者負担が少ない手術が可能となる。だけでなく、手術時間の短縮や医師の働き方改革にもつながっている。

脳動脈瘤は、大きさ10mm未満が多いが25mmを超える場合もあり、医療機器メーカーも多様な径や長さのコイルを用意している。コイル1本の価格は約10万円と決して安くはない、病院側も幅広いコイルを準備する必要があり、どうし